大久保

藩鑑

百七十六

内閣文庫	
和書	
類	三四六八二
號	二人〇
冊	一五八
函	一五九
架	二四

内閣文庫		
番號	和 34682	
冊數	278 (176)	
函號	159	1

国立公文書館
National Archives of Japan

藩鑑巻之三百二十五目録

杜部三

大久保平右衛門嘉原忠負

同　七郎右衛門嘉原忠世

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

藩鑑巻之三百二十五

大久保

平右衛門義忠貞八左衛門義忠義ゥ子なりしを衛門と稱す天文六年廣忠卿伊勢國に死せしとき忠貞ゥ先新八郎忠俊等ゥ一族

国立公文書館
National Archives of Japan

等しく相謀り
廣忠卿をむかへ岡崎城に還し入れ
奉るかゝて
廣忠卿世を去り給ひし後
東照宮に仕へ奉り數度の高名を
ゆゝしく天正十年十二月十二日
七十二歳にして死す
一 廣忠卿没の年のゝち松平門徒正
信宣の逆心により志ゝゝ伊勢國山
田に遁れ給ひしゝ今川義元のゝち
らひて三河國牟呂の城に移りし
まゝのゝち忠負たり一心称ありけ
れハ偖牟呂にとゝまりて一族等と岡崎に
とゝまりかくり伝宣う指揮に志ゝ
かひ潛に同志の人をかゝゝひ遂に天
文六年六月朔日岩津城に還し入れ

たてまつる 三州八代記古傳集 大久保忠教自記

一 天文十一年壬寅春藏人伝孝罪あり
不常没收せらる伝孝大に驚き今
川殿まつりてのゆるさ言を申
披うんとに國濃殿 すなわち贈大納言 家の出羽なり かの罪
科かろうにとてゆるし給へと伝
孝深くうらみ奉り世兵を起して
いくさせんとす氏伝孝と中八安祥殿
の出羽岡崎殿の出叔父なれ籠城の士
なりまゝにそなはる三河市忠負
弥三郎忠文兄弟も彼手に屬に兄弟
傷害にむかひて我等伝孝の命等も
なりにこまる者の作を家りて彼手ふ
たつつ害なりいそて反逆の人なくみ
してまつさ君ハ背くへさい
さ岡崎より来るんとひしかく人こ留

なしと同じて長勝殿の弟なる信孝
彼等を教みてこそ軍せんとは思ひつ
も今はいつかもかゝるべうすとて殘
とゝまる云々十七歳を引具し尾張
の國なるおもむき織田信長に志
しるかり 藩幹譜

一 廣忠卿世を去り給ひ
東照宮いまゝ所手代官として今川義
元の許よりおとゝ世しかゝ三河のハ主の君と
作へきを方もなく悲歎の一族をそしめ
譜第の人々も乗地まてみな今川家の
家分となりそ〳〵〳〵歎へさり
しかゝ今ハ古民のひとゝ〳〵耕作を
業とし世を大久保家記別集

一 弘治元年八月二日織田方の尾州海東
郡蟹江の城郭を義元の命に依て

徳川勢と共降りとして砦を攻め
しに城を突て出て奮戦するゆゑ寄
手敗する所に大久保忠右衛門忠勝大
久保平太郎忠員と子七郎右衛門忠世
同治右衛門忠佐阿隈四郎兵衛忠政松浦
八郎兵衛清員と子八十郎左衛門正
こ城を突退け遂に城を陥る世
人これを聖記の七本槍とそしる大久

稱ス　國朝大業廣記

一　永禄三年三州刈谷十八町縄手の合戦
に敵あまたすみ来る忠員忠世忠
佐その子一族ひと同僚の人とも
に力戦して砦をつゝる　大久保家前書

一　永禄六年一向専修の伝聞起しこ
彼宗門に与する所家人多く報ずるも
とも忠員八一族二十六人と共に右衛門

患後の和田村の宅をとり立て居るか
ら人同志の人々より集りて賀々宇
つ三十月より始め三年二月迄つゝまる
賜敬す　大久保家家記割集
家忠日記

七月右馬の義原忠世八平右馬忠貞
の子なり童名を新十郎とい
ふ若年よりして
東照宮に仕へまつり世所々に戰場
に供奉し天正三年遠江国二股城
を賜りて三城を守る同十八年
豊臣秀吉相模國小田原城せめ

東照宮兵を率てともにおもむき給ひしに供奉せしの蒲城を
をとされしそさ秀吉より毛枝城
小山を忠世に授けらるる後
東照宮忠世を山田郡の城主とする
一領地百万石を賜ふ文禄
三年九月十日病すとき年
六十二歳

一 天文十四年三州渡村合戦のとき忠
世とし十歳と雖も合せ一日のう
ちに一番槍を入れ敵を討取り
る 大久保家尚書
ときに年十
一 天文十七年三州山中合戦のとき忠
世一族と共ひとともに敵をうちこれを
やぶる同十八年安祥の城を攻むる
とき忠世敵と対ひたりかつ弟数度

ゆゑをつゐまゐらせ首級を降り　同上

一　元和二年の春

徳川殿出軍ありて三河吉田の輝の城をせめ〻〻廣瀬の城まむかふる七郎右衛門忠世織田左の家子澤田弥庫助をうちとる是よりして大久保一族つゐに

徳川殿まゐらひて軍のさきをかけ

せられとらるる　蔭軒雜

一　永禄三年尾州石瀬合戦に忠世忠佐同

半蔵人ひとしく敵を合せ

同年三州刈谷合戦のとき忠員忠

佐等と同〻戦功あり　大久保家覚書

一　永禄六年北秋三河吉大異

徳川殿まゐらかひ給ひ〻せ〻に乱妨

佐時とゐ所上宮寺とゐ寺なり

彼等の伝僧宗徒あまた逆徒し去て良
義腓を大将として東條の城に移
し入まゐらせ悪僧をたつね國中所
のほかに騒動に及ひぬ彼等か旦那法
家人のうちにも多くありしかくそ
すゝめに牒し合て逆徒となりすゝ
ものおほかりし故君臣ハ二世の恩となり
なれとも如来悲願の大恩ハ未来永劫

のかれさる綱にかゝりしたとへ譜代恩
侍の主君に背きたてまつるとも仏法
の破滅を擁護せさらんやとて一同し
て或ハ兄弟を引具し父子ともにつれ
て都合侍百余人皆寺々にこそ籠
りけるされとも大久保七郎右衛門忠世その
一族親類のものともみなを離れ候家のよ
しみを捨て一人もそむきまいらする

ものなり上和田しらい所要害を構へ彼寺に地向ひて自ら和に攻戦ひ終る逆徒を打ちて寺を破却して住僧義濃を人質にとり捕へ来り一揆人の面々罪を免るる

一 大久保八代の家の嘉長先祖より忠世に至るまで武勇武道忠義

清勝義談

比類なし 二州に名を高くして一向宗のときも上和田村忠世の屋敷へ大久保一党の者ども三千六百余人お集り一向の城郭を防ぐ大久保八日蓮宗にて二州上和田の法華寺の大旦那なれば法華経の旗を立て押寄せ戦功を立る比類なし大久保忠世の命を受け

敵へ

大神君由馬にて入〻世子〻〻に忠
世の室家由馬のうへ匠陽積を献
す

神君則ち老を左上ゆらを作世の
つゝしハ燒味噌其風味よ〻七所奏
う妻ハ世子持よりうんしと宣ひて佐殺
相りうもしきるつ　大久保家留書
大久保家記別集

一　永禄六年十二月廿七日

神君腹心の長大久保忠一揆と勝敗
を決せん為め計策の郷勝満寺の袋
み押寄の世既よ寺門よ攻る大久保七郎
忠世先登しけるを敵ハ多ゝ深ゝ
重ゝれを窺ひ鉄砲を放ゝ相向忠世
も必鉄を携へけるう忠世と〻發し〻
ゆ多を打倒す深落を負て引退
〻と〻く　武徳編年集成
大三川志

一　永禄七年今川氏真一宮の砦を攻むるを
守るるを多百助信俊長澤より援兵をこし
けるに遠江出馬あり味方烈〻戰ひて
勝利を得しかハ石川日向守家成多百助
大久保七郎右衛門忠世等浜松より合見
戰味方微兵にて今川大軍を退ろ〻
氏真の月前まで究竟の者六人を討とる
各〻馬前ふをいさ〻軍忠を勵むらゆく
なり年ごろの憤を散〻歡よ慰すと屢
感〻たまし汗まつ〻ち鮑を揚ひとく
陣所より帰りて疲労を慰すへしと作
りける　國朔大業廣記　大三川志

一　元亀三年
權現様と武田信玄と遠州三方原合戰
に忠世一伯の人數歡と相いとゝ濃を合せ
歡の先鋒の伯を退崩す然ともとも歡大

軍にて世のたゝかひ
權現様出陣利なくして市退散そのうへ
ろまでなせまゝりて
權現様へ作上られしハ味方のちりぢり
なる軍士ど一所ゆつめ淀松城へ入らせ
ゆゑにと忠世云上ル
權現様列ち出張ゆゑを忠世に下さる忠世
さいうかけの左右にてさしなくるとゝあと

より来る軍士とも相集る敵襲ひ来る
処を洪炮をすさまるゝ敵ちかけ
によるとすゝみ来るゝす　大久保家留書

一味方原退ゆ渡遣事助とゝ引の討死
たり小坂新助引すりのゝとてを取て
ひけハ首さかりて引ゝ孫ける七郎右衛門
馬上にて見を見ゝくを取てひけハ引き
ぬるのゝ見を取てひけとゝ中されゆる

是を取くゝ引のけて敵を首をとる

也とて新助終りける　三河記

一　武田信玄味方原の合戦にうち勝て日既

に暮けるとき味方原或はさいの峠に

近遍に陣取けるに涙れ方ハ今取奪ふ敵

陣へ取うちてさいの峠へ退落すべしと

議したりけるさしも我取ぬる也んとい

ふ者なりしかハ大久保七郎右衛門天野三郎

兵衛尉かゝるに弱こゝろを脱すハ敵ハ

競を作るなるへし諸手の涙炮を集めて我く

下連に取討仕るへしと申上る

家康之を聞るへし諸手より涙炮を集

めて一せに宣へとも是ハ戦を学ぶ者

少なく二三十挺も集りける大久保天野

是を請て手前の涙炮を合せ百挺

かりに真一密よさいの峠を押よせ穴山梅雪

陣へつゝみ歩ともし敵をさ絶て敗北
さいう崖に落て死する者数百人大久保ハ
減ず穴山まさかりに敗うちハしりけるとも
後陣ハ静り返りてまち舞ることハ深入を用
と制して引くりける信玄笑てさひ
剛敵うるを豆の戦ゝ能出ぬまゝ討せさこそ内
も孔きてらんとゝ思ひしにさハなくて後
との負軍にかゝりにハなくさるとゝ今
宵の夜討ハ大胆奇特なりと感せられける
とかや 太平夜談抄 東照傳再加

一 遠州味方原軍の崖戦ひのときさ忠世の舎弟
治右衛門忠佐戦ひをくまゝ崖ゑ落くゝる
ゝ長ゝ登る事を得す 時ゝ忠世陣を出
けるハ忠佐をゝ取介しを為へ引上ける
としくゝ 大久保家記別集

一 天正二年天野官兵衛ゝ佐攻殺なるゝ

とかりくゝ大井城へ出取籠ゆきまとりる連日
雨降り長報運送のさゝりなりを取て出る家
中行も疑儀仕るにつき出会成へ出勢を入
らるゝ所に城主宮内左衛門出張を付たゝし
くゝ一戦を始むこれを仮て出家人元数寄討
死と遂る時る大久保彦右衛門康政おとゝ取く
返ゝ相戦ひ首数多討とり敵を追
拂ひ行事をゝ出会の要害へ出馬を入うせ
らる代退にの帝大久保七郎右衛門同ん板浦久兵
衛を負てゝ引に七郎右衛馬より飛下り長
ふ家ゝ引退けとり久兵ゝ引ゝる馬のとり
所うるとう如き者ハいうほゝ討とりとも
行事をゝ行る大将ゝる人の馬離をするのかと
八橋も無賢あるまゝ家まゝしゝハ七郎右衛門
礼義も不ゝるそとゝとくハ久兵ゝれの
馬を家ゝ生さ大将を捨殺ゝてハいうせん

とゝ家〳〵ゝまとハ七郎右衛門いやなゝハ馬を
捨るよりいひ捨〳〵引んとする処ゝ小五郎門
一説石上鬼角 弟来り七郎右衛門ハそやのさたるとて
いひて久蔵を引て馬ゝ乗せ近て七郎
右衛門ゝ向ひたり七郎右衛門ハ長家
弥あゝと大笑ひとゝ小者二人打つれとゝ細道
ゝ崖をとり迯こゝ〳〵 久蔵ゝ跡より追来るゝも
の七郎右衛門と実家す二人も續て飛ける

所ゝ大笑揚羽の蝶の横あを指るゝを投捨〳〵
るゝを欲見ゝ〳〵是をとゝんとする家を弥あを
ゝとかゝるゝとり取ゝんとすゝハ欲弥あを一
刀切たりるに七郎右衛門取て迯〳〵る欲ゝ
人討とりけゝ
東慈寺別将の下に弱長あ〳〵と患世を佐
賞安人ゝりけゝ 常山紀談 安家記録集

藩鑑巻之二百二十六目録

礼部四

大久保七郎太夫藤原忠世

国立公文書館
National Archives of Japan